

平成26年度教師海外研修(ラオス) 研修報告書

学校名	名古屋市立名東高等学校	氏名	新倉 春美
-----	-------------	----	-------

1. 現地研修に対する各自の目的 とその達成度

(特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて)

私の勤務校では国際理解教育に力を入れており、特に国際英語科では国際的視野を持ち国際社会に貢献できる人材の育成を目指している。私自身は国際英語科3年生の時事英語という選択科目を担当しており、今回のラオスでの研修では生徒の学びに資するリソースを多く集めることができた。今後、生徒たち自身がアジアの開発途上国が抱える課題に気づき、自分にできることを考えるための授業がますます可能になると考えられる。これまで時事英語の授業では、教育・憲法と平和・沖縄と基地について取り扱い、生徒によるグループプレゼンテーション等を通して問題解決能力を育成するよう努めてきた。2学期からはアジア諸国の開発課題とその解決策及び持続可能な開発のために必要なこと等について生徒のアイデアを引き出すような授業ができたかと考えている。その際に、今回ラオスで知った開発課題とそれらに対する様々な事業の事例は大変有効であり、1学期に扱った 이슈と関連させて扱える事例も複数存在した。これらのリソースをいかに効果的に用いるかが今後の課題である。

2. 訪問国から学んだこと (気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど)

(1) 柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

モン族の村を訪れた際に、素晴らしいクロスステッチの刺繍作品を製作しているモン族のおばあさんに出会った。伝統的なモン族独特の刺繍作品の美しさに感動を覚えた。ラオス文化は隣接するアジアの国々と類似している印象を受けたが、必ずしもその限りではないことがわかった。モン族の刺繍で表現されているのは自然の草花のパターンであったし、織物の染色は徹底して天然の染料を用いていた。紙漉きにも自然の草花を使って模様を出していた。歴史的建造物を見ても仏教文化とアニミズムの融合が見てとれる。ここまで自然に寄り添った文化の構築がされているのは誇らしいことであり、国外にもアピールできるものがたくさんある。しかし、観光地となっている場所では「1ドル!」といった声が飛び交い、安さを売りにするアピールの仕方に胸が痛くなった。安いから素晴らしいのではないし、文化的価値は金銭では測れない。ラオスの人々が伝統的に大切にしてきた文化を我々外国人が理解し、経済至上主義の物差しとは異なる価値観をラオスから学ぶ必要性を感じた。

(2) 柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

UXO-Laoにて不発弾のお話を聞いたとき、不発弾の問題はラオスにも日本にも共通する問題であると同時に、犠牲者を生み出すシステムが同一であることを認識した。ラオスではベトナム戦争時に多くの爆弾やクラスタ弾が落とされ、今でも多くの人々が不発弾の被害に遭っている。日本でも第二次世界大戦時の爆撃により不発弾が発生しており、その多くは沖縄に今でも存在している。また、ラオスにおいて不発弾の残っている

エリアは貧困の割合が高いエリアとなっている。日本でも、沖縄に在日米軍基地の70%以上を集中させて負担を強いている。一部の地域にリスクが集中しているということは、その地域の人たちの人権が保障されないということである。どんな地域もどんな人も切り捨てない支援・政策の在り方を日本もラオスも考える必要がある。授業の中で生徒が平和について考える時、どうしても「日本は平和だけど、平和でない国もある。」といった発想に陥りがちである。これはこれで間違いとは言えないが、現在の日本が置かれている危機的な状況に目を向けたり、戦争の被害者・加害者としての日本を認識するためには、不発弾という共通点についての学びは有効である。

(3) 柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から

ラオスにおける開発課題の多くは、現在の日本も直面している課題や、かつての日本が取り組んできた課題であった。例えば、障がい者に対する社会的理解の不十分さや、家族が支援の中核を担わざるを得ない現状は程度の差こそあれ共通している。ゴミ処理の問題についても、ゴミの埋め立てによる環境汚染防止や3Rの推進はラオスも日本も取り組んでいきたい課題である。しかし、共通の課題があっても、それに対するアクションはラオスと日本で異なる場合もある。例えば、教育の質の向上という点においてはラオスでも日本でも問題意識があるが、ラオスでは教師の養成や識字率の向上に力を入れているのに対し、日本では生徒のコミュニケーション能力や問題解決能力の育成に力を入れている。ゴミ処理の面でも、ラオスではコストが高いため焼却処分ができない。ラオスで出会った日本人の支援者の方々は、焼却しないが安全なゴミ処理方法を工夫されていた。自国のやり方を押し付けることなく互いに学びあい、それぞれの国の現状に合った問題解決を行う必要性を実感した。生徒と開発課題について議論する際にも、多様な価値観に基づいた支援という視点を入れていきたい。

3. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

どの現場を訪問させていただいても、支援の方法が一方向的でないところに感心した。日本のやり方を押し付けることなく、ラオスの現状に合った支援を工夫して行っていた。また、ハンドオーバー後の体制を考えている事業がほとんどで、ラオスの人たちだけで事業をまわしていけるよう配慮されていた。さらに、公的機関への支援だけでなく「草の根技術協力事業」として、NGOへの支援を充実させているところに共感が持てた。学校が万能でないのと同様に、政府や行政などの公的機関も万能ではない。地域や市民が主体となって社会に変革をもたらすことが今後もますます必要になってくるだろう。

今後必要だと思われるのは、(既に行われているのかもしれないが) 諸外国の支援者との連携である。欧米の支援者がつくったゴミ焼却施設が一度も使われないうまま残っているという話も聞いた。同じアジア人として日本人の方がラオスにおけるニーズを把握しやすいのであれば、それを他国の支援者とも共有し一緒に支援を進めていくことは可能ではないのだろうか。

4. 訪問先ごとの「感じたこと」や「学んだこと」

② 香川らしい国際協カうちわ産業振興支援プログラム／ホアイホン職業訓練センター

「香川らしい国際協カうちわ産業振興支援プログラム」は日本の技術とラオスの環境がもたらす素晴らしい支援の一例である。香川県の丸亀うちわの技術が竹の豊富にとれるラオスで生かされている。これまではバスケットなどの商品を製作・販売していたそうだが、竹の扱いに慣れたラオスの職人たちに丸亀うちわを作ってもらい新しい商品として販売している。日本の丸亀に研修に来たことのある方にも出会うことができ、職業支援という以上に互いの交流と文化に対する理解が深まっていることの重要性を感じた。販促にも力をいれており、ラオス人のマーケティング担当者によればもっと販売を増やしたいとのこと。ホアイホン職業訓練センターではうちわの製作体験をさせていただいたが、熟練の技術が必要であることが体験してみてわかった。このセンターでは染色・織物・縫製の職業訓練を行っており、女性や若者が訓練を受けていた。織物の作品にはセットアップだけで1か月以上かかるものもあり、織物作品の15%程は日本に輸出されているという。ここでもまたラオスと日本の社会的・経済的・文化的繋がりが生まれている。(新倉春美)

⑥ 王宮博物館、ワット・マイ、ワット・シェントン、プーシーの丘など

(ルアンプラバンの歴史・文化施設)

ラオス文化を一言で表すとしたら、「仏教文化とアニミズムの融合」という表現がいちばん的確であろうか。ラオスの仏教寺院や歴史的建造物を見ると、タイやカンボジアに類似した仏教文化に触れることができる。ラーマーヤナのモチーフもところどころにちりばめられており、改めて大陸はつながっているのだということを感じることができる。プーシーの丘はその絶景もさることながら、自然の中に突如あらわれるブッダやナーガの像に心を奪われる。仏教文化が単独で存在しているのではなく、あくまでも我々は自然の中において生かされているのだという感情が湧いてくる。王宮博物館では、かつてラオスに王朝が存在していた頃の遺産を見ることができる。近隣の国々との関係の中で歴史的にも社会的にも翻弄されてきたラオス。王朝が滅んだことについてどのような感情を抱くかは人それぞれだと思うが、アニミズムという土壌があるからこそ、人や自然に寄り添った文化の構築ができていないのだろうか。(新倉春美)

⑨ サヤブリー県病院／青年海外協力隊（看護師）活動

県立病院という公的な場でありながら、家族の繋がりがあから成り立つシステムという印象を強く受けた。昼休みにナースステーションには誰もいないが、必要であれば家族が呼びに行く。トイレや着替え・食事・洗濯などの世話も家族が全て病院で行い、仕事を辞めてまで看病に来ることもあるという。「家族の繋がりが深い」と言えばそれまでだが、その環境は誰にでも保障されているわけではないだろう。また、青年海外協力隊の方が、退院した後のベッドのシーツ交換もされないまま次の患者が入ってきたり、男女同室であるなどの問題があることを指摘しておられた。医療は人間の最後の拠り所である。誰もがその恩恵を受けられるような支援が必要だと感じた。しかし、まだ改善点はあるものの、ラオスの医療はずいぶん改善したという。新しい保険制度ができて医療を受けやすくなったり、乳幼児の予防接種を受ける割合が増えているなど、明るい面もある。日本の医療を学びに来られるラオスの医療関係者もいるとのこと。このような繋がりが今後も継続していくことを願う。(新倉春美)

⑮ ルアンプラバンの観光村（紙すき・織物の村、地酒造りの村）

ラオス文化の断片を日本に持ち帰る際にこの3か所をぜひ利用してほしい。紙漉きの村では天然の植物から紙をつくる工程を見ることができる。紙の中には葉や花を入れて模様にし、それが便せんやノート・封筒などになって売られている。村の中を歩くと、紙を干して乾燥させているのを見ることができ、その光景もまた美しい。織物の村ではハンドメイドのスカーフや織物作品を購入することができる。ラオス人の職人が天然の染料で染めた糸を使って織物を織る姿も見られる。時折「1ドル!」といった声がかかるのには胸が痛くなる。ラオスの織物は素晴らしいので、手仕事を安売りしてほしくない、観光客には品質の良い作品を正当な価格で購入してほしいと思った。地酒造りの村では、もち米から醸造したお酒を試飲したり購入することができる。伝統的な方法でお酒をつくっている工程も見学することができ、大変興味深い。（新倉春美）

⑯ 障害者雇用クッキー販売所／アジアの障害者活動を支援する会

アジアの障害者活動を支援する会（ADDP）では、車椅子製造・IT・美容・ベーカリーなどの部門を設定し、障がい者の職業支援を行っている。私たちはそのうちのベーカリー部門であるクッキー販売所を訪問させていただいた。ADDPでは、障がいを持った方々が働いて収入を得ることや仲間を得ることで自信をつけると同時に、自立した障がい当事者のロールモデルを社会に発信していくことに力を入れている。商品を販売するためのマーケティングも戦略的で、企業のCSRの一環として販売をさせてもらうようアプローチをしたり、次世代の人たちが障がい者を受け入れる土壌をつくるために大学で販売したりと工夫されていた。また、日本のパティシエにレシピをもらったりと、一見国際協力や障がい者支援に関係なさそうな人も巻き込んで支援の輪を広げていることに感心した。働いていらっしゃる方々の表情はとてもイキイキとしていて、どんな人にとっても社会との繋がりを持つことが必要なのだと実感させられた。（新倉春美）

5. 印象に残る写真2点 とその解説

●写真1…ファイル名 [TJI_0519]

◇キャプション： 除去した不発弾（UXO-Laoにて）

◇解説文：

UXO-Laoにて除去した不発弾と共に。日本の生徒たちが「平和でない状態」をイメージするのは困難である。本物が持つインパクトとそこから引き出される生徒たちの感情的変化を大切にしたい。

●写真2…ファイル名 [BAN_0976]

◇キャプション： 環境教育のアクティビティ

◇解説文：

青年海外協力隊の隊員さんにより、サヤブリーの子どもセンター



一にて行われた環境教育のアクティビティ。ラオスの学校現場において環境教育はまだ馴染みが薄いため、地域の施設が果たす役割は大きい。

6. 来年度参加する先生へのアドバイス（持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など）

- ・衣類をたくさん持っていく必要はない。ホテルでランドリーサービスも利用できるし、現地で購入しても良い。

7. その他全般を通じての感想・意見など

なし。

以上